日本統治下の台湾

刊行記念フェア

選書・コメント

甲南大学
平井健介先生

図書リスト / ご自由にお持ちください

平井健介先生プロフィール

1980 年生まれ。2003 年、慶應義塾大学経済学部卒業。2008 ～ 09 年、台湾中央研究院近代史研究所訪問学員。2011 年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程単位取得満期退学。博士（経済学）。2012 年、甲南大学経済学部専任講師。2019 年、名古屋大学大学院国際経済政策研究センター国内研究員などを経て、現在、甲南大学経済学部教授。

主な業績に『砂糖の帝国――日本植民地とアジア市場』（東京大学出版会、2017 年）、「日本植民地の経済」『二つの大戦と帝国主義 II（岩波講座　世界歴史　第 21 巻）』（岩波書店、2023 年）。

平井健介先生の本

日本統治下の台湾

開発・植民地主義・主体性
平井健介 著　名古屋大学出版会
ISBN9784815811587　［2024 年刊行］

自著紹介

本書は、「日本植民地の経済成長は「日本のおかげ」であったのか」を問題関心として研究してきた私が、日本統治時代の台湾経済を概説した通史です。

日本統治時代の台湾を概説する書籍は、これまでに何冊も刊行されていますが、それらは主に政治の視点から叙述されていました。しかし、植民地統治の最大の目的は、その資源を開発し利用することにありますから、経済の視点からも叙述される必要があります。1895 ～ 1945 年の 51 年間、総督府はどのような動機から台湾を開発し、それは台湾社会にどのような影響をもたらしたのでしょうか。台湾の人びとは開発にどのように関わったのでしょうか。台湾の開発は日本以外の地域、特にアジアの経済とどのような関係にあったのでしょうか。本書はこうした問いに答えるために書かれた、経済面から叙述したものとしては初の概説書です。

学説を「刷込み」する

「刷込み (imprinting)」という言葉があります。生後間もない動物の子が、特定期間内に目にした動物や物体を固定的に認識し、以後それを見ると機械的に反応することを指します。これは鳥類で最も顕著とされていますが、ヒトも同様です。私は勤務先の大学で経済史を教えています。高校の日本史や世界史で教わる内容の中には、経済史学においてはすでに修正されているものがありますが、授業でそれを何度強調しても、高校で学んだ内容を繰り返す学生が後を絶ちません。一度「刷込み」されたものを変えるのは難しいようです。

ただ、以上のようなケースはまだましです。「刷込み」されたものは学術研究の成果に基づいており、日進月歩の研究の結果として修正されたに過ぎないからです。他方、日本植民地研究は厄介な問題を抱えています。日本史や世界史では日本植民地についてほとんど記載がありません。したがって、ここで「刷込み」されるわけではありません。学生たちが何から「刷込み」されるかというと、史実の誤認や切り取りに基づく解釈、すなわち「俗説」です。

これまでの教員生活のなかで、俗説に「刷込み」された学生を多く見てきました。せっかく植民地について学んでみようと思ってくれたのにと、自分の力不足を何度も痛感しました。特に台湾については、現在の台湾が「親日」とされていることや、日本統治時代のみを対象とした概説書が少ないため、俗説が受け入れられやすい環境にあります。日本統治時代の台湾について学んでみようと思った人びとが、「俗説」ではなく「学説」に「刷込み」されるような環境を作らなければならない、そういう思いで本書を作りました。本書を通じて、日本統治時代の台湾に関する玉石混交の情報を批判的に検討する視点を養っていただければ幸いです。

フェアに向けて

最近読んだ青波杏氏の『日月潭の朱い花』(集英社、2024年)の中に、印象に残る場面がありました。現代の台湾で働く主人公サチコが、台湾人の友人から「日本人はアジアの歴史を知らない」と笑われた時に、自身の台湾史への無知に気づいて、以下のように恥じます。

> わたしたちは悲しいくらい歴史を知らない。それなのに根拠のない優越感という負の遺産だけ引き継いでいる。……わたしは、どれだけのことを知らないできてしまったんだろう——。この土地に暮らすひとたちが、歴史を思い返すときに避けようのない、葛藤や混乱、その複雑さをなにも知らないでただ優しさに浸りきって生活していた。

台湾史研究者は少なからず、「現在の台湾は「親日」なのに、なぜ日本統治時代のことをほじくり返すのか」という質問を何度も受けてきました。しかし、台湾が「親日」であることに仮託して、日本の台湾統治の実態を知ろうとせず(「知らず」ではなく)、あるいは史実を自分たちに都合良く解釈することが、台湾理解を深めるとは私には到底思えません。

今回のフェアで、台湾理解を深めるための書籍を紹介できる機会をいただき、大変光栄に思います。日本統治時代に関するものが中心になりますが、学術書のほかに、入門書、新書、小説、エッセイも挙げてあります。一冊でも多く手に取っていただければ幸いです。

『日本統治下の台湾』を読む前に

台湾総督府

黄昭堂 著　ちくま学芸文庫

ISBN9784480099327 ［2019 年刊行］

日本統治時代に特化して、歴代総督を時期区分の軸とする通史編と、統治の構造や差別の実態などに焦点を当てたテーマ編で構成される、バランスの取れた概説書です。2019 年にちくま学芸文庫に収録されて手に入りやすくなりました。経済に関する紙幅が少ないですが、本書を通読して全体像を把握しておくと、『日本統治下の台湾』の内容理解に大いに助けになります。

『日本統治下の台湾』を読んだ後に

誰の日本時代

ジェンダー・階層・帝国の台湾史

洪郁如 著　法政大学出版局

ISBN9784588603624 ［2021 年刊行］

『日本統治下の台湾』で取り込めなかった議論はたくさんありますが、本書もその一つです。歴史は文字を残す能力と機会にめぐまれた人の記録に基づいて描かれる傾向にあり、『日本統治下の台湾』も同様です。しかし、植民地社会では、文字を残せた人は多数派ではありません。本書は教育の周縁・外部に置かれた人たちや、「家」や政治環境によって不可視化されやすい女性を取り上げて、台湾史を描こうとする試みです。

入門書

〔台湾の概説書〕

台湾

四百年の歴史と展望
伊藤潔 著　中公新書
ISBN9784121011442 ［1993 年刊行］

台湾通史の古典です。17 ～ 20 世紀の台湾を概略的に把握したい人は、まずこれを手に取ってみてください。

増補版 図説 台湾の歴史

周婉窈 著　石川豪／中西美貴／中村平 訳
濱島敦俊 監訳　平凡社
ISBN9784582411096 ［2013 年刊行］

伊藤潔『台湾』と並んで、本書も台湾の通史的理解に欠かせません。本書の特長は「漢人開発史観」からの脱却を目指しているため、先住民に関する記述が豊富なことです。また、多くの図版・写真があることも台湾理解を助けてくれます。原住民を対象とする研究書としては、松田京子『帝国の思想――日本「帝国」と台湾原住民』（有志舎、2014 年）や、北村嘉恵『日本植民地下の台湾先住民教育史』（北海道大学出版会、2008 年）があります。

あなたとともに知る台湾

近現代の歴史と社会
胎中千鶴 著　清水書院
ISBN9784389500924 ［2019 年刊行］

台湾と日本との関係がどう変化してきたのかという視点から、台湾理解を一歩も二歩も進めてくれる台湾通史の「超入門書」です。「ですます調」で書かれていることや、現在の日台関係から話を説き起こしていく叙述スタイルも、本書の魅力です。

〔日本統治時代の人物に焦点を当てた書籍〕

植民地台湾を語るということ

八田與一の「物語」を読み解く
胎中千鶴 著　風響社
ISBN9784894898028 ［2020 年刊行］

八田與一は、日本統治時代の台湾で巨大な水利施設を造った技術者として、日台双方で慕われている数少ない人物です。しかし、彼の顕彰が始まったのはごく最近のことでした。本書は八田が顕彰されるに至った時代背景、台湾と日本では八田の「物語」の力点が異なることが明らかにされます。八田與一の業績を台湾統治の「善政」と理解している人に、ぜひ読んでほしい一冊です。

「昭和」を生きた台湾青年

日本に亡命した台湾独立運動者の回想
１９２４－１９４９
王育徳 ／近藤明理 著　草思社
ISBN9784794218131 ［2011 年刊行］

日本統治下の台湾で近代教育を受けて東京大学へ進学し、戦後は国民党政権から逃れるために日本に亡命した王育徳の自伝です。被治者が学歴をつけることの切実さ、学歴を得ても内地人と同等に扱われない苦悩など、植民地教育の実態や「空気感」を知る最良書です。東京藝術大学に進学した画家・陳澄波を扱った柯宗明氏の小説、『陳澄波を探して』（岩波書店、2024 年）もお薦めです。

〔『日本統治下の台湾』に関係する入門書〕

日清戦争

近代日本初の対外戦争の実像
大谷正 著　中公新書
ISBN9784121022707 ［2014 年刊行］

学校で「日清戦争は下関条約の締結で終わった」と学んだと思いますが、それは誤解です。日清戦争はそれだけで一つのジャンルとなるぐらい多様な視点から研究が進められています。本書は日清戦争の入

門書で、戦争の展開はもちろん、メディアが日清戦争をどのように描いたか、人びとは日清戦争にどのように協力したのかなども概説されます。

海を渡った日本人

《日本史リブレット》056
岡部牧夫 著　　山川出版社
ISBN9784634545601　［2002 年刊行］

2024 年現在の「海外在留邦人」は約 140 万人ですが、1930 年には約 180 万人もの日本人が外地（台湾や朝鮮など）と海外に居住していました。日本近代史において「移民」は重要なキーワードです。本書は、移民の時期区分や類型化というマクロ的視点と、移民社会や個人に焦点を当てたミクロ的視点をあわせ持つ、移民史の入門書です。

稲の大東亜共栄圏

帝国日本の〈緑の革命〉
藤原辰史 著　吉川弘文館
ISBN9784642057523　［2012 年刊行］

「稲も亦大和民族なり」。同化政策は日本の植民地統治の特徴ですが、その対象は言語や氏名にとどまらず、なんと稲の品種にも及びました。本書は、米の増産の美名の下で、台湾や朝鮮の在来品種が日本品種によって淘汰されていくプロセスと、その下で農民が直面した葛藤が描かれます。

「大日本帝国」崩壊

東アジアの 1945 年
加藤聖文 著　中公新書
ISBN9784121020154　［2009 年刊行］

大日本帝国の崩壊は日本（当時は内地）の人々だけでなく、台湾、朝鮮、満洲国の人びとにとっても大事件でした。台湾・朝鮮・満洲国・樺太・南洋群島に暮らす人びとが 1945 年 8 月 15 日をどのように迎えたのか、その後どのようにして大日本帝国から離脱して新しい国家に編入されていったのかが描かれます。

〔『日本統治下の台湾』に関係する小説・エッセイ〕

台湾鉄路千公里

完全版

宮脇俊三 著　中公文庫

ISBN9784122072510 ［2022 年刊行］

日本の鉄道の踏破をライフワークとする著者が、1980 ～ 90 年代に台湾の鉄道を踏破した際の旅行記。詳細な旅程はもちろん、著者が見たもの感じたものを淡々と記していく文体に、旅先で出会う台湾人との可笑しなやり取りが絶妙なアクセントとなって、一気に読み終えてしまいます。本書をお供に台湾旅行を楽しんでみるのも良いかもしれません。

熱源

川越宗一 著　文春文庫

ISBN9784167919023 ［2022 年刊行］

日本人にされそうになったアイヌと、ロシア人にされそうになったポーランド人の物語です。アイヌ研究の一人者となったポーランド人ブロニスワフが、植民地支配を正当化する名文句「文明化の使命」の欺瞞性を、「暗闇を照らす光を装って、隣人たちの営みを灼いている。」と喝破するシーンは、身に迫るものがあります。

さらに深く

〔経済史・台湾史〕

経済社会の学び方

健全な懐疑の目を養う
猪木武徳 著　中公新書
ISBN9784121026590 ［2021 年刊行］

経済学を紹介した概説書は多くありますが、本書は経済学を含む社会研究一般に共通する手法や姿勢――理論や統計データとの向かい方や距離感、社会研究における歴史の重要性などを、著者の経験も交えながら丁寧に説明してくれています。これから社会科学分野を学ぶ人にぜひ手に取ってほしい一冊です。

歴史的に考えるとは どういうことか

南塚信吾／小谷汪之 編著　ミネルヴァ書房
ISBN9784623086351 ［2019 年刊行］

歴史がどのように描かれるのか、歴史学は何をしているのかを知るに最適な本です。小野寺拓也・田野大輔『検証ナチスは「良いこと」もしたのか？』（岩波書店、2023 年）の「はじめに」もあわせて読めば、歴史を書くことは「すでに明らかになっていることをただ調べればよいだけの単純な作業ではない」（学生の授業感想文より）ことが分かります。

台湾研究入門

若林正丈／家永真幸 編　東京大学出版会
ISBN9784130362771 ［2020 年刊行］

タイトル通り、台湾を理解する、あるいは研究するに重要となる論点・キーワードを、第一線の研究者が解説した入門書で、台湾を研究する人はまず手に取りましょう。日本植民地の研究動向を、地域ごとにまとめた日本植民地研究会編『日本植民地研究の

現状と課題』（アテネ社、2008年）や、テーマ・トピックごとにまとめた日本植民地研究会編『日本植民地研究の論点』（岩波書店、2018年）も参考になります。

〔私の研究史――経済史〕

緑の工業化

台湾経済の歴史的起源
堀内義隆 著　名古屋大学出版会
ISBN9784815810320 ［2021年刊行］

日本植民地の特徴は工業化を経験したことだといわれていますが、それは日系資本による軍需工業化でした。本書は、台湾人資本による中小工業化の進展を解明することで、植民地経済における被治者の主体性、戦後台湾の中小零細工業化の原点を示したものです。私にとって著者の研究は、総督府の工業化政策を卒業論文のテーマとしたときに真っ先に勉強した先行研究でした。

近代アジアと台湾

台湾茶業の歴史的展開
河原林直人 著　世界思想社
ISBN9784790710202 ［2003年刊行］

工業化研究では堀内氏に勝てないと悟った大学院修士時代。アジアの視点を入れることで台湾経済における「日本」を相対化しようと指導教員に相談したところ、「最近こんな本が出たのよ」と手渡された一冊。華僑による台湾茶の輸出取引を分析し、台湾

が帝国日本の一部であるとともに華僑通商網の一部でもあったことを指摘しました。本書を乗り越えることが、私の研究者人生の出発点でした。

砂糖の帝国

日本植民地とアジア市場
平井健介 著　東京大学出版会
ISBN9784130461238 ［2017 年刊行］

『近代アジアと台湾』を乗り越えるため、あえて対日関係の象徴であった砂糖を取り上げて、台湾とアジアとの関係を解明した研究書です。アジア砂糖市場と台湾糖業との関係、砂糖の生産と輸送に不可欠な資材（肥料・燃料・包装材）の供給源を分析し、日本・台湾関係の強化を図るためには、アジアを中心とする帝国外地域への依存が不可欠であったと結論付けました。私を「研究者」にしてくれた一冊です。

植民地台湾の経済基盤と産業

須永徳武 編著　日本経済評論社
ISBN9784818823716 ［2015 年刊行］

日本統治時代の台湾経済を、交通インフラ、産業政策、市場の 3 つを軸に考察した 12 本の論文で収めた論文集で、初学者が研究のイロハを学ぶにはちょうど良いものだと思います。日本・朝鮮・満洲の経済史・経営史の研究者が参加した点も特長です。

〔隣接領域――政治史・教育史・衛生史〕

台湾抗日運動史研究 増補版

若林正丈 著　研文出版
ISBN9784876361977 ［2001 年刊行］

日本植民地における抗日運動と言えば、朝鮮の「三・一独立運動」が有名ですが、台湾の政治運動はほとんど知られていません。台湾では、総督の命令と総督府の予算を審議する「台湾議会」の設置を求めるという自治獲得運動（「台湾議会設置請願運動」）が行われました。本書はその実態を克明に明らかにした台湾政治史の古典です。

「同化」の同床異夢［新装版］

日本統治下台湾の国語教育史再考

陳培豊 著　三元社

ISBN9784883032754　［2010 年刊行］

総督府の教育政策をなぜ台湾人は積極的に受容していったのか。本書は「同化」を「民族への同化」と「文明への同化」に分け、総督府と台湾人が求める「同化」の中身が、時代状況に応じて変化しつつも決して交わらない「同床異夢」の状況にあったことが明らかにされます。

マラリアと帝国 増補新装版

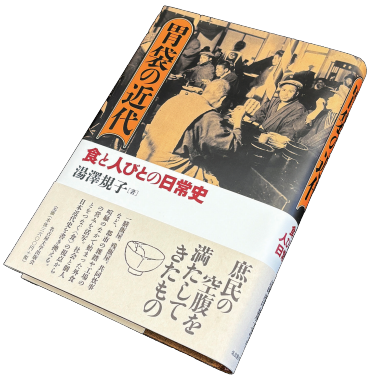
植民地医学と東アジアの広域秩序

飯島渉 著　東京大学出版会

ISBN9784130203128　［2023 年刊行］

開発を疫病の流行要因に位置づけ、「経済開発＝幸福の増進」が楽観的であることを指摘した「開発原病」論。植民地統治の正当性は医療整備を通じた疫病の抑制によって担保されていましたが、実はその疫病の多くは植民地開発によって生み出されていたのです。本書はマラリアを取りあげて、開発原病や植民地医学・帝国医療の問題を扱っています。

名古屋大学出版会の刊行図書から
平井健介先生おすすめの１冊



胃袋の近代

食と人びとの日常史

湯澤規子 著　名古屋大学出版会

ISBN9784815809164　［2018 年刊行］

食事は毎日行われる行為ですが、歴史研究ではブラックボックスでした。家庭内の「日常茶飯事」なので記録が残りにくいからです。本書は工業化の過程で大量に創出された、農村から都市に出てきた労働者や、工場の寄宿舎に入る女工など、家庭から切り離された人たちの食欲がどのように満たされたのかを、賄飯屋・残飯屋や共同炊事を取り上げて解明しています。本書の中に「台湾米」を発見した時、「ここにいたのか」と感激しました。

学術書は、こんなにおもしろい！

選書・コメント

平井健介

発行　名古屋大学出版会［2024 年 8 月］

店頭では取り扱いのない書籍も紹介されていますが、
あしからずご了承ください